

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 5 月 15 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	田島夏子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県串間市幸島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物・行動生態野外実習・ニホンザルの母子の行動の観察
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 5 月 7 日 ~ 平成 26 年 5 月 13 日 (7 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター幸島観察所/鈴木崇文氏、高橋明子氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
渡航内容
今回の渡航では、宮崎県串間市にある京大野生動物センターの幸島観察所、及び幸島において野外調査の基礎知識を深め、野生動物の行動観察法を学ぶことを目的として行われた。日程は以下の通りである。
日程
5/7 集合・食料買い出し・カメラトラップ設置
5/8 幸島へ渡る・ニホンザルの観察
5/9 ニホンザルの観察(・食料採取)
5/10 撤収・観察所で戻る
5/11 都井岬で岬馬の観察・カメラトラップ回収
5/12 まとめ・発表
5/13 片付け・解散
今回の実習では、ニホンザルや野生馬の行動観察を行うことはもちろんのこと、今後野生動物を研究する上で欠かせない野外調査のスキルを身に付けることが大きな目標であった。実際、台風の接近により幸島でのサル観察時間が短くなってしまったこともあるが、自分の中での本実習での最も大きな収穫は、電気も水もないところでもある程度は生活できる力がついたことだと思う。
まず、集合日に幸島での食料の買い込みから、頭を悩まされた。冷蔵庫がないところで3日間日持ちする食料を7人分買い込むのはなかなか工夫が必要であった。また、幸島に渡ってからも、包丁や鍋、飯盒以外の調理器具がほとんどない中で料理をすることは小さい時に家族でキャンプに行っていた経験で、とても楽しかった。物がなくて自然のものを利用してどう工夫するか、また、どんな備えを持参するかを、経験豊富な先生方の知恵をお聞きすることで学ぶことができ、とても勉強になった。幸島での観察2日目に、雨でぬかるんだ急斜面を何回も滑り落ちながら下って海岸へ降り、夕食のおかずになるカサガイを獲ったことがとても良い思い出となった。
また、カメラトラップの使用と、各自がテーマを考えて行った野生餌付けニホンザルと岬馬の観察、そしてその結果のまとめを行ったことは大変有意義であった。まず、カメラトラップでは、ニホンザル、イノシシ、ウサギが設置期間中はほぼ毎日映っていた。観察所のすぐ裏の山もこんなに多くの野生動物に利用されていることは驚きであった。また、直接観察ができない動物種でも、カメラトラップを用いることで行動観察を行うことができることを実感できた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



カメラトラップで撮影したイノシシ



カメラトラップで撮影したウサギ



カメラトラップで撮影したニホンザル

ニホンザルの観察は、時間が足りなかったがとても興味深いものであった。私は、イルカの行動観察しか行ったことがなかったので、イルカと比較するとサルは各個体間での行動が多様で見やすいと感じた。テーマは、イルカの観察でコドモの行動を見ていたので、ニホンザルでもコドモの行動を観察しようとした。しかし、コドモは個体識別が難しいこと、観察時間が短く観察個体が少なくなってしまったことなどから、十分な分析が行えなかった。昨年生まれたコドモを雌雄1個体ずつ観察したが、コドモの性格からか、行動パターンが大きく違っていた。行動の違いが性差か個体差か、そして個体差なのであればその個体差の要因は何か、母親の順位なのか、など、疑問が残った。また、発表の際に、結果データのまとめかたやグラフの作り方などにおいて先生方から様々な指摘をいただいたことがとてもありがたかった。今後の研究発表に生かされればいいと思う。



ニホンザルの母子



海岸にまかれた餌に集まるニホンザル

また、台風の接近に伴い幸島滞在が予定より1日短くなったことから、都井岬で岬馬の観察をじっくり行うことができた。サルに比べると観察される行動が少なかったが、牡馬一頭と複数の牝馬とその仔馬で形成されているハレム構造が興味深かった。一歳児、当歳児の仔馬が多く観察できたので、これらの行動も個体同士で分析を進めると面白いのではないかと思った。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



都井岬での岬馬

岬馬の母子

今回の実習では、何も無いところで生活し、調査するための衣食住をどう工夫するかを学んだことが大きかった。このような生きるための知恵を持つことは野外調査をする人にとって、そしてそうでない人においても、人間として重要なことなのではないかと思った。

6. その他 (特記事項など)

サルの個体識別から、発表まとめの際のご助言まで、様々なご協力をいただいた幸島観察所の鈴木さん、高橋さんに深く感謝いたします。また、本実習はPWSリーディングプログラムの援助を受けて行われました。プログラム関係者の皆様に感謝申し上げます。